

# 11 課

6月11日

## 夢の達人ヨセフ



安息日午後 6月4日

### 暗唱聖句

相談した。「おい、向こうから例の夢見るお方がやって来る。」(創世記 37 : 19、新共同訳)

<sup>たが</sup>互に言った、「あの夢見る者がやって来る」。(創世記 37 : 19、口語訳)

### 今週の聖句

創世記 37 章、マタイ 20 : 26、27、使徒言行録 7 : 9、創世記 38 章、  
創世記 40 : 1～41 : 36

### 今週のテーマ

創世記の最後の部分を占めるヨセフの物語(創37～50章)は、カナンでの彼の最初の夢で始まり(同37:1～11)、彼のエジプトでの死で終わります(同50:26)。創世記はヨセフの物語に、この書に登場する他のどの父祖よりも多くの紙面を割いています。ヨセフはヤコブの息子たちの1人にすぎませんが、創世記の中で、アブラハム、イサク、ヤコブに並ぶ偉大な父祖として描かれています。

私たちは、ヨセフの生涯を特徴づける二つの重要な神学的真理を学びます。その一つ目は、神はその約束を成就されるということ。二つ目は、神は悪を善に変えることができになるということです。

今週、私たちはヨセフの生涯の初めの部分に焦点を当てます。彼はヤコブのお気に入りの息子でしたが、皮肉にも、「夢見るお方」(パアル・ハハーローモト)〔口語訳では「夢見る者」〕(創37:19)というあだ名で呼ばれます。それは文字通りには「夢の達人」、つまり夢を究めた者という意味でした。この呼び名は彼に実にふさわしいものでした。なぜなら、彼は夢を見、理解し、預言的な意味を解き明かしただけでなく、彼の生涯をもって夢を成就させたからです。

私たちはこれらの章に、再び、人の心の悪とよこしまにもかかわらず、神の摂理が確かに果たされるのを見ます。

ヤコブは遂に約束の地に住みます。イサクがただの寄留者であったのに対して、この聖句は、「ヤコブは……カナン地方に住んでいた」（創37:1）と記しています。ところが、やっと彼らが約束の地に住み始めたその時に、再び、今度は家族の中に問題が起きます。この争いの原因は、土地の所有や井戸の使用についてではなく、おもに精神的な問題でした。

**問1 創世記 37：1～11 を読んでください。兄たちがここまでヨセフを憎むように仕向けた家族内の力関係とは何だったのでしょうか。**

当初から、ヨセフはヤコブが年老いてからの子であり（創37:3）、特に父のひいきの中で、「どの兄弟よりも……かわいが」られて（同37:4）育ちます。父のひいきは遂に、王子〔または王女〕が着る衣服であった（サム下13:18）「すその長い晴れ着」（創37:3、新改訳の注によれば「綾織りの着物」、英語新欽定訳では「色とりどりの着物」）を彼に作ってやるまでになります。それはラケルの最初の子であるヨセフを長子の地位にまで高めようとするヤコブの隠れた意図の表れでした。

実に、将来、このヤコブの望みは実現することになります。ヨセフは最終的に長子の権利を受けることになります（代上5:2）。ですから、この時、ヨセフの兄たちがどれほど彼を憎んだか、そして彼との平和的な話などできるはずもなかったことは疑いありません（創37:4）。

さらに悪いことに、ヨセフは兄たちの非難すべき行動を告げ口します（創37:2）。告げ口が好きな者はいません。

そのようなわけで、神が彼を高い地位に置き、兄たちは彼の前にひれ伏すことになるという夢を話したとき、彼らはさらに彼を憎むようになったのです。夢が繰り返されることで、それが預言的意味を持っていることが確認されることもあります（創41:32参照）。ヤコブは、ヨセフをあらかじめさまに叱ります（同37:10）が、この出来事を心に留め、その意味について瞑想し、その成就の時を待ちます（同37:11）。ヤコブはおそらく、これらの夢には何か深い意味があるに違いないと考えたのでしょうか。そして彼は正しかったのです。しかしながら、その時は、彼はまだその意味を十分に理解できませんでした。

**マタイ 20：26、27 を読んでください。ここにどんな重要な原則が示されていますか。私たちはこの原則をどのように私たちの生活の中に現すことができるでしょうか。**

しかしながら、恐ろしい出来事が続くことになります。そして、その事件が起きた理由は理解できないものではありません。あなたが憎む相手が身近な存在であり、ましてや肉親であれば、遅かれ早かれ、問題が起きるのは避けられないでしょう。そしてそうなったのです。

**問2 創世記 37：12～36 を読んでください。この事件は、変えられていない心はどれほど危険で、悪に陥りやすいかを私たちに教えています。そしてだれの心にも、そのような危険が潜んでいるのです。**

兄たちがヨセフを憎んだのは、神の寵愛（使徒7：9）をねたんだからでした。その寵愛は続く出来事の中でより確かなものになります。ヨセフが道に迷うと1人の人が彼を見つけて案内します（創37：15）。兄たちが彼を殺そうとしたときも、ルベンが間に入り、殺さずに穴に投げ入れることを提案します（同37：20～22）。

特にそれが肉親に対してであるだけに、このような場面で彼らの憎しみがこのような行為におよぶとは想像しにくいことです。若者〔兄〕たちはどのようにしてこんなに残酷になれたのでしょうか。彼らは、その行為が父にどれほどのショックを与えるか、一瞬でも考えなかったのでしょうか。彼らが父のヨセフへのひいきを理由に、父に対して何らかの怒りを抱いていたとしても、同じ父の子の1人にこのようなことをするとは、本当にひどいことです。これは、人間がどれほど悪くなれるかを、なんとよく示していることでしょう。

「しかし、兄弟たちのなかには、不安な気持ちをいただいた者があった。復讐によって得られると思った満足感がなかったのである。やがて旅人の一団が近づいてくるのが見えた。それはヨルダンの向こうのイシマエルの隊商で、香料その他の商品を持ってエジプトへ行く途中であった。ユダは、兄弟を穴の中においたまま死なせるよりは、異邦の商人に売ろうと言い出した。そうすれば、彼を都合よく追放することができて、殺さないですむ」（『希望への光』105ページ、『人類のあけぼの』上巻232ページ）。

彼らはヨセフを穴に投げ入れておいて、後で殺そうと考えていましたが、隊商が通りかかり、ユダはヨセフを売ることを兄弟たちに提案します（創37：26、27）。ヨセフはイシマエル人に売られた後（同37：28）、エジプトのある人物に売られます（同37：36）。こうしてこの事件は彼の未来の栄光へとつながるのでした。

あなたの悪い性質が、あなたが想像もしない人生の一場面で行動に現れるようなことが起きる前に、神の力によってあなたの悪い性質を変えていただくことはなぜそんなに重要なことなのでしょう。

ここにタマルの物語が出てくるのは場違いではありません。この出来事は時系列で、ヨセフがエジプトに売られた後に起きたであろうことは（創38：1）、ユダが〔その後〕兄弟たちと別れたことでつじつまが合います。この事実は、彼が他の兄弟たちと意見が合わなかったことを示しています。そのことをうかがわせる言葉や動機が前の章〔37章〕にすでに出てきており、この出来事が教える神学的教訓は、やはり同じように、悪い行為が救いへと結びつく前向きな出来事に変えられるということです。

**問3 創世記 38 章を読んでください。ユダの行為とカナン人の女タマルの行為を比べてください。どちらが正しいでしょうか。それはなぜですか。**

ユダはカナン人を妻とし（創38：2）、3人の息子、エル、オナン、シェラをもうけます。ユダは正当な血筋を絶やさないために、長子であるエルにカナン人のタマルを妻として迎えますが、エルとオナンは彼らのよこしまのゆえに神に殺され、ユダは末の子シェラをタマルに与えると約束します。

かなりの時が流れ、ユダは彼がした約束を忘れていたようです。彼が妻の死後、慰めを得るために出て行くのを知り、タマルは彼の約束を果たさせるために娼婦を演じる決心をします。娼婦に払う現金を持ち合わせなかったユダは、その娼婦がだれであるかを知らないまま、後で自分の群れから山羊を送ると約束します。

一方、タマルは彼が彼女に山羊を送るまでの間の当座の保証として、彼のひもの付いた印章と杖を求めます。タマルはこのただ一度の出会いによってみごもります。後に、タマルは姦淫したことをユダに叱責されたとき、彼のひもの付いた印章と杖を見せます。ユダはすべてを理解し、彼女に謝罪します。

このあさましい物語の結末にペレツが誕生します。それはヤコブのように「出し抜き」という意味であり、〔双子の〕二番目として宿ったのに初めて出てきます。そして彼はやがて、ダビデの父祖として救いの歴史に名を残すことになるのです（ルツ4：18～22）。タマルとは言えば、イエスの母マリヤ（マタ1：16）に至る系図の中で、ラハブ（同1：5）、ルツ（同1：5、6）、ウリヤの妻（同1：6）へと続く4人の女性の1人となります。

この物語から学ぶことのできる教訓の一つは、神はその恵みによってタマルを救われたように、悪を善に変えられるということです。同じように、主は神の民をイエスの十字架によってお救いになります。そしてヨセフの場合、神は彼の身に起きた困難を変えて、ヤコブと彼の息子たちの救いとされるのです。

タマルの出来事に「邪魔され」ましたが、再びヨセフの物語に戻りましょう。ヨセフは今、宮廷の役人たちのための牢の責任を持つ「侍従長」の奴隷として働いています（創40：3、4、同41：10～12）。

**問4** 創世記39章を読んでください。ポティファルの下で家の管理を任されたヨセフの模範に注目してください。何が彼をこのような成功へと導いたのでしょうか。

〔ポティファルに仕えるようになって〕ほとんどすぐに、ヨセフは、することすべてをうまく計らう人として評価されます（創39：2、3）。彼がきわめて善良であったので、主人は彼をまったく信頼し、「財産をすべて彼の手任せ」、さらには「家の管理をゆだね」ます（同39：4）。

しかしながら、この成功は彼を墮落させません。ポティファルの妻が彼に目をつけ、自分と寝るように迫ったときも、ヨセフはきっぱりと断り、「そのように大きな悪を働いて、神に罪を犯すこと」（同39：9）よりも、仕事と安全を失うことを選びます。ヨセフが断ったためにプライドを傷つけられたその女は、僕たちと夫に、ヨセフが彼女を犯そうとしたのだと偽って訴えます。その結果、ヨセフは投獄されます。

ヨセフはこの時、私たちがみな経験したことのある経験をします。すなわち、神に見捨てられたと感じるような困難な状況にあってなお、「主が……共におられ」る経験です（創39：21）。

ついに、主が動かれます。主はヨセフが監守長の目にかなうように導かれます。彼の主人の家でと同じように、ここでも、主はヨセフを祝福されます。ヨセフは明らかに天分に恵まれた人ですが、このようなさらに悪い状況にあってなお（結局、彼は未だに奴隷なのですが）、彼はそこで最善を尽くします。彼の天分が何であれ、聖書は、最後には、彼の成功はただ神によってもたらされたものであると語ります。「監守長は、ヨセフの手にゆだねたことには、一切目を配らなくてもよかった。主がヨセフと共におられ、ヨセフがすることを主がうまく計らわれたからである」（創39：23）。才能に恵まれたすべての人々、「成功した」すべての人々が、それらのすべてがどこから来たのかを覚えておくことほど重要なことはありません。

創世記39：7～12を読んでください。ヨセフはポティファルの妻の口説きにどのように抵抗しましたか。ヨセフはなぜ、彼女の求めに応じることは神に対して罪を犯すことだと考えたのでしょうか。彼は罪の性質と罪の何たるかについてどのように理解したのでしょうか。

問5 創世記 40：1～41：36 を読んでください。ファラオの夢と役人たちの夢の両者に共通することの意味は何でしょうか。

神の摂理を秘めた出来事は続きます。ファラオの前の2人の役人、給仕役の長と料理役の長が〔過ちを犯し、獄に入れられ〕、ヨセフの監督下に置かれます（創40：1～5、創41：9～11）。2人とも理解できない夢に悩まされていました。なぜなら「それを解き明かしてくれる人がいない」からでした（同40：8）。その時、ヨセフが彼らの夢を解き明かすこととなります。

2人の役人の夢のように、ファラオも二つの夢を見ますが、だれもその夢を解き明かすことができません（創41：1～8）。その時、摂理の内に、給仕役はヨセフのことを思い出し、ファラオに彼のことを進言します（同41：9～13）。

役人たちと同じように、ファラオもその夢に悩まされていました。ファラオも同じようにヨセフにその夢を告げ（創41：14～24）、ヨセフはそれらの夢を解き明かします。役人たちの夢と同じように、ファラオの夢も並列した象徴が描かれていました。すなわち、7頭ずつの肥えた牛とやせた牛、そしてよく実の入った穂とやせた穂は、それぞれ豊作の年と凶作の年を意味しており、7頭の牛と七つの穂は、同じメッセージを二度繰り返すためでした。それはヨセフの見た夢と同じように、それが神から示された夢であることの証拠でした（同41：32を同37：9と比較）。

ファラオに夢を解き明かしたのはヨセフでしたが、彼は、これからしようとすることを王に示したのは、まぎれもなく神（エロヒーム）であることをファラオに確信させます（創41：25、28）。あたかも、ファラオがこの時、夢の解き明かしを受けたのは、〔夢を解き明かした〕その者にその地を治めさせることを王に決心させるためであったかのようにでした。彼は次のように言います。

「神がそういうことをみな示されたからには、お前ほど聡明で知恵のある者は、ほかにはいないであろう。お前をわが宮廷の責任者とする。わが国民は皆、お前の命に従うであろう。ただ王位にあるということだけで、わたしはお前の上に立つ」（創41：39、40）。

なんと驚くべきことでしょう。神の摂理の内に、ヨセフはポティファルの家の管理者から、獄のすべてを任せられる者に、そしてエジプト全土を治める者へと上り詰めます。この物語は、どんなにひどい状態に見える中にあるかと、神の摂理がどのように現されるかを、なんと力強く語っていることでしょう。

私たちはどうすれば、まったく摂理の内にあると思えず、神は沈黙しておられるとしか思えないときにも、なお神に信頼すること、神の約束にすぎることを学ぶことができるでしょうか。

参考資料として、『人類のあけぼの』第20章「エジプトにおけるヨセフ」を読んでください。

「ヨセフとダニエルは、ちょうど子供からおとなになる年ごろに、家庭を離れて捕われの身として異教の国へつれて行かれた。ことにヨセフは、大きな運命の変化をともなった数々の試練に会ったのであった。彼は少年時代を父のひざもとに愛されて育ち、ポテパルの家にあっては奴隷となり、やがて主人の信任を得てその友となり、学問と観察と人々との接触によって教養を身につけた家宰となり、無実の罪をうけて弁明の自由も赦免の望みもなく国家の罪人としてパロの牢獄につながれたが、非常に危機に際して国民の指導者として召し出されたのであった。そうした中であって、彼に誠実な心を持ち続けさせたのは何であつたらうか。……

ヨセフは、少年時代に、神を愛しおそれることを教えられた。シリヤの星空のもとに張られた天幕の中で、彼は父のヤコブから、ベテルの夜の異象、天と地の間にかけられたはしごやそれを上り降りしていた天使たちや天のみ座からご自身をヤコブに表わした神についての物語をきかされた。父がヤボクの河畔で格闘したあげく、心の中に宿っていた罪を絶ったときに勝利者となり、『神と共なる君』という称号をうけた物語もきかされた。

羊飼いの少年として、父の羊の群れの見張りをしていたヨセフの純朴な生活は、彼に体力と知力の発達をもたらした。ヨセフは、自然を通して神と交わり、聖なる委託物として父から子へ伝えられたとうとい真理を学んで、堅実な精神と確固たる原則を身につけた。

ヨセフが、人生の危機に面したとき、すなわち子供時代をすごしたカナンのが家から、奴隷の運命が待ちうけているエジプトへの恐ろしい旅の途中に、肉親の住む天幕のかくれた山々を見納めたときに、かれは父ヤコブの神を心に覚えていた。少年時代の教訓を思い出し、真実な人間になって、どんなときにも天の王の臣下としてふさわしい行動をとらなければならないと決心したときに、彼の魂は感動した」（『教育』47～49ページ）。

### 話し合いのための質問

- ① ヨセフをダニエルやイエスと比べてください。共通する点は何でしょうか。ヨセフとダニエルは彼らの置かれた状況で、どのようにイエスとイエスの生き方を示したでしょうか。
- ② クラスで、木曜日の最後の問いについて話し合ってみましょう。彼らと同じように、特にヨセフの場合と同じように、私たちもどうすれば、事態が好転しないときにも神に信頼することを学ぶことができるでしょうか。